

Acoustic Guitar Field

“音響学”の”と訳される”アコースティック”ということば。これが楽器に用いられるとき、それは単に”エレクトリックではない”ことの表現だけにとどまらず、人間性そのものを感じさせる深い味わいをもっています。それは言い換えるなら、人間が生活をいとなむ中で求める潤い、やすらぎといったものの原点と言えるかもしれません。アメリカにおけるギターの歴史は、ヨーロッパや大陸から移民によってもち込まれたフラメンコや、クラシックギターが始まりでした。当時、このガット弦ギターは民謡や生活の中で自然に生まれる歌の伴奏としてなくてはならぬ楽器でした。やがて20世紀に入り、スティール弦の使用にともないアメリカにも少しずつ、独特の音楽が形成されていきました。その礎となったのが、あのクリスチャン・フレデリック・マーティンの考案したXブレイシングのトーン・ホバーでした。これにより表板に強度が与えられスティール弦の使用が可能になったのです。あらゆる文化の始まりがそうであるように、ギター音楽の中にスティールの響きを入れるという、一つの試みが現代アメリカ音楽への新しい世界を開いたといっても過言ではありません。その第一のステップとなっ

たのが、”カーター・ファミリー”のメイベル・カーターのピッキングでした。今でこそアコースティック・ギターを手にした誰もが試みる奏法ですが、クラシック奏法が一般的であった1920年代においては、画期的なことでした。これはスティール弦ならではの奏法で、メイベル・カーターが黒人ブルースマンから影響をうけて完成させたと言われています。彼等の音楽も職業ということより、ギターを弾き歌うことが生活の中の大切な要素だったのです。この流れは50年代のウディ・ガスリーらに受け継がれ、ついにあの1960年代のモダンフォークブームとなって花開きました。アメリカにおける多くの問題、人々の悩みをアコースティックな音にのせて唱う運動は、市民運動などと共にアメリカはもちろん、世界に拡がり日本にも上陸しました。こうしたムーヴメントの直後にビートルズが登場したのです。さらに様々なグループが数多く現われました。彼等は全てエレクトリック・サウンドという表現形式で、商業音楽の世界を駆け上っていきました。一方、カーター・ファミリーのいわゆるマウンテン・ミュージックの流れを汲んで発展していったのがビル・モンローに代表されるブルーグラ

ス・ミュージックです。カーター・ファミリー時代の二拍子(TWO BEAT)がそのまま基本として生きていて、そこにジャズの要素ともいえるアドリブが加わった演奏は、正にアコースティック・ミュージックの味わいが百パーセント生かされたものでしょう。人間の生活、環境、道具などについて考え直されてきている今日、フォークからロックへとめぐるしい変化を続けてきたカリフォルニアにも”自然にかえる”音楽が完全に認められてきています。アコースティック楽器による最も古いリズムを基本に残しつつ、高度なテクニックを要求される音楽的広さと深さ。ここにアメリカ音楽の原点を見出すと同時に、最も先端をいく新しさを彼等は感じたのではないのでしょうか。これはアメリカだけにとどまらず、今や、日本の若者の間に定着した一番モダンな音楽であると言えます。



▲BLUEGRASS NIGHT JAM SESSION IN YORK PA. 1973 photo by N. Kameyama

Guitar Details

